## 第131回 三方限古典塾 ('17,9,21)

## 呂 新吾(1536~1618)「呻吟語」(その4)

- 1 人を攻むる者、五分の過悪あるとき、ただ他を攻むること三四分なれば、ただ彼、余懼あるのみならず、而してまた心を傾けて引服し、以ってその弁口を塞ぐに足る。攻めて五分に到れば、已に渾厚を傷い、而して我、救性なし。若し更に多きこと一分なれば、これこれに貽るに自ら解くの資を以ってす。彼はその一によりて五を得、我はその一を貪りて五を失う。これ言責家の大戒なり。 (人情)
- (意訳) 人を批判し責める場合には、相手に五分の過ちがあっても、そのうちの三、四分ぐらいを取り上げるなら、他の過失に対して発覚の恐れを抱くだけでなく、その全てをあばかない寛大さによって、心から自分の責任を感じて服従し、彼の弁解の口をふさぐに十分である。ところが批判・責めが五分にまで到れば、こちらの度量の狭さをさらけ出すばかりか、相手を救うという目的も達成できない。

さらに、その上にありもしないことまで付け加えたりすれば、加えたその一分によって相手に弁解の口実を与えることになる。相手はその一分によって五分の過ちまで弁解するし、こちらは余計な一分を付け加えたことによって、五分のことまで無効にしてしまう。人を批判し責める者は、このことをくれぐれも戒めなければならない。

- (余説) 人情の微妙な機微に触れたなかなか面白い指摘です。確かにそのとおりであり、厳しすぎると反発が起こります。そのような失敗は、私自身数多く犯してきたように反省します。ではこれからは上のとおりにできるかというと、それは全く自信がありません。また、威厳によって人を導くことと、恩恵を施すことによって人を導くことの難しさも下記の参考で述べているとおりです。なかなか悟りきれぬのが人間というものです。
- (参考) 呻吟語・人情「威を積むと恩を積むと、二つのものはみな 禍 なり。威を積むの禍は救ふべき、恩を積むの禍は救い難し。……恩一分なればすなはち悦ぶ。恩を積むの後には、止まりて加へざれば、すなはち薄しとなし、わづかに毫髪を減ずれば、すなはち以って怨となす。恩窮まればすなはち窮す……。」
  - 2 射の中らざるや、弓には罪なく、矢には罪なく、鵠には罪なし。書の工ならざるや、筆には罪なく、墨には罪なく、紙には罪なし。 (広喩)
- (意訳) 弓を射て的に当たらないのは、弓の責任でもないし、矢の責任でもない。また、 的に責任があるわけでもない。書がへたくそなのは、筆の責任でもないし、墨の責任でも ない。また、紙に責任があるわけでもない。
- (余説) この種の責任転嫁をやっていたのでは、何事でもいつまでたっても進歩向上は望めません。諺に言う「弘法は筆を選ばず」です。その一方では、よい仕事を残した職人衆ほど、道具に凝り大切にしていることも事実です。(職人衆昔ばなし・S42 文藝春秋)

しかし、スポーツや芸術・工芸等の世界のみでなく、世の中にはこの種の責任転嫁が頻繁に見られることも現実です。特に政治や行政、経済などにおいて責任の所在や言葉の解釈があいまいにされ、たらい回しにされて結局はうやむやのうちに終わり、闇に葬られることがたびです。危機管理の徹底こそ重要です。

- 3 世の人、人の過失を聞けば、便ち喜び談じて楽しみてこれを道ふ。人、己の過失を聞けば、既にこれを援護し、またこれを痛疾す。人の称誉するを聞けば、便ち欣喜してこれを誇張す。人、人の善を称するを聞けば、既にこれを蓋蔵し、またこれを捜索す。試みに思え、遺簂の念頭は、これ君子なるか、これ小人なるかを。 (人情)
- (意訳) 世間の人々は、他人の過失を耳にすると、うれしそうな顔をしてそれを話題にする。ところが他人が自分の過失を指摘されると、なんとか言い訳をしたり、その人をひどく憎む。逆にもし自分が褒められると、たちまち踊りあがって喜びそれを誇張する。ところが他人が他の人の善行を称賛するのには、知らぬ顔をして覆い隠し、そのアラ探しをする。考えてもみたまえ。これが君子のすることか、小人のすることかを。
- (余説) これも1と同じく、人情の機微に触れた面白くも厳しい指摘です。逆のような気もしますが、「人の不幸は蜜の味」とか「隣の貧乏は鴨の味」のように、確かにそのような恥ずかしい面も人にはあり、君子であることはなかなか難しいように思われます。
- (参考) 以下は、最近読んだエッセイからです。

「人間というものは、他人の不幸を見つけることで自分の幸福度を計るらしい。」 「誰でも自分が幸せであるだけでは十分でない。やはり他人の不幸がなければ。」 「他人のあらは気になるが、自分の欠点には気づかぬもの、気づきたくないものだ。」 「ドイツ語の schadenfreude (シャーデンフロイデ)とは、他人の不幸を知った時の喜びの意味だ。」

- 4 天下の事を幹するには、期限を以て自ら覚めれにすることなかれ。事には測られざるあり、時には給らざるあり。常に期限の内に余りあれば、多少の受用の処あり。 (応務)
- (意訳) 世の中のあらゆる事を処理するに際しては、期限がまだ十分あるので、それまでにすればよいのだと考えて、自分に対してゆっくりしてはならない。よいうのは、物事には予測できない要素がありどんな事態が生ずるか分からないし、やってみると時間が足りないということもあり得る。それで日頃から期限内に余りがあるように、余裕をもって早くしてしまえば、それに伴うプラスもずいぶんと大きいはずである。
- (余説) ぎりぎりにならないと着手しないのは、その人の性癖でもあるようです。若い頃、 テニスで「構えが早すぎてミスする生徒は、すぐにうまくなる」とか「振りが早すぎると いうミスはあるが、早く構えすぎたというミスはない」と聞いたことがあります。

この古典塾の資料も、この先、わたしにどんなトラブルがあるか予測できませんので、 できるだけ形だけは早く整えておいて、残りの期間で修正するよう努めています。

(参考)「明日ありと 思ふ心の仇 桜 夜半に嵐の 吹かぬものかは」

この歌は、幼くして両親を失った9歳の親鸞が仏門に入ろうとして、比叡山の天台座主の慈円を訪ねた時、すでに時間が夜になっていたために「明日になったら得度の式をあげてやろう」と言われた時に詠んだものと伝えられています。

「はかなくも 明日の命を頼むかな 今日も今日もと学びをばせで」 薩摩日新公いろは歌